

秋田大学
日本語・日本文化研究論文

日本における漢字廃止論とその社会背景

秋田大学教育文化学部

チンキン
陳鑫

指導教員：市嶋 典子 先生

目次

1.はじめに	3
2. 漢字廃止論への反論	5
2.1 漢字廃止論が出現する前の漢字の使用状況	5
2.2 漢字廃止論の錯誤	6
2.3 漢字表記と日本語の国際化	9
3.漢字廃止論の出現と社会背景とのつながり	12
3.1 統一国家の建立と民族主義の形成	12
3.2 西洋より経済の後れ	14
4.おわりに	16
参考文献	17

日本における漢字廃止論とその社会背景

1. はじめに

日本語の表記は一般的に漢字、ひらがな、カタカナの三種類に分けられている。生まれてから漢字の環境で育てられた筆者にとっては、日本語の勉強が大変便利だと感じた。事実上、漢字圏の日本語学習者は平均的に欧米やほかの地域の学習者より記憶や運用などが早くできる。今の世界では漢字が中国語と日本語だけで使われているが、過去にはほかにも朝鮮語やベトナム語などのような漢字を使っていた言語があった。しかし、近代化とともに、中国語と日本語以外の言語は漢字を捨てた。

かつて幕末明治に出現し、戦後といった時期に強く提唱された、漢字表記を日本語から排除しようとする漢字廃止論という論がある。近年は下火になっているが、いまだに提唱している学者も存在する。実際に日本が近代化における漢字廃止論の先駆者であった。日本で最初の論考は前島密の1886年の「漢字御廃止之議」である。漢字廃止論は日本発祥だが、朝鮮半島やベトナムなど周辺のほかの漢字を使用していた国にも影響を与えた。20世紀の前半から70年代にかけて漢字の本家である中国にまで漢字廃止論が起こった。その後、漢字圏諸国で近代化とともに主流思想になっていった。戦後には、漢字を廃止する国もあれば、漢字を簡略化する国もある。すなわち、漢字廃止論が各国の政策になっていった。中国と日本が様々な事情によって、簡略化のところで止まった。20世紀の70年代になり、今に至るまで、漢字の優れたところが再発見され、漢字を使っている国の文化シンボルとなり、漢字廃止論が下火になったとも言える。

日本では、近年カタカナ語の増加が社会的な問題になっている。このような状況において、漢字の日本語にとっての意義を再考することが必要だと考えられる。田中（2011）は、漢字表記によって「成人と子供との間に言葉の違いを生み、子供が知識を得る障害」が生じることや、「日本の大和言葉の発達をさまたげる」ことなどの弊害が生じると主張する。漢字廃止論に関する先行研究は、田中（2011）のように、言語学的視点から漢字の廃除に対し賛否を述べる

研究が多く、さらに本質的な漢字廃止論と社会背景とのつながりやそのつながりの深層の意義などを論じたものは少ない。日本の漢字廃止論の出現、発展、高潮、下火といった段階があるが、それと各時代の社会背景や経済状況などとはどのようなつながりがあるのだろうか。実際に、文字が優れたかどうかとはいえるのかというのも現実的な問題だと考える。果たして、文字そのものが優れたかが分かれているのか、それとも、その背景にある経済や政治の影響力との関係がさらに強いのか。さらなる未来の漢字の発展方向に関しても考えるべきだ。本稿では漢字廃止論の正誤を論証し、漢字廃止論と社会背景とのつながりを考察した上で、今後日本語の中の漢字をいかに取り扱うべきなのかを論じる。

2. 漢字廃止論への反論

2.1 漢字廃止論が出現する前の漢字の使用状況

中国に朝貢をしていた朝鮮、琉球王国、ベトナムでは、古代中国から漢字を輸入して使用した。日本もまた中国の勢力下に入ったことは無かったが、漢字を輸入し使用している。また、シンガポール、マレーシアのように、中国から移住した人たちが多く住み、漢字を使用している地域がある。これらの漢字を使用する周辺諸国を包括して漢字文化圏と呼ぶ。

犬飼(2015)は、日本語は文字を持たない言語であり、中国から漢字を取り入れたと述べる。取り入れた当初は、漢字が言語情報をあらわすという認識はなかったと推測した。日本では漢委奴国王印や古墳時代の稲荷台1号墳に埋蔵されていた鉄剣の銘文記載が、日本における初期の漢字事例とされている。

犬飼(2015)は、現在世界中の文字の状況について以下のように述べている。

現代に使われている世界の文字の起源は遡れば2つだけである。古代エジプトのヒエログリフは、表語文字であったが、語形を指定する書記形態から一部の字体が表音用法で使われるようになり、古代のフェニキアには表音文字として伝わった。その音節文字が古代ギリシャに伝えられて子音と母音とにそれぞれ専用の字体をもつ表音文字に改造された。それがローマ字のもととなった。そのほか、キリル文字、インド文字、チベット文字、モンゴル文字なども起源はヒエログリフである。もう1つの起源は漢字である。漢字は表語文字として今日もアジアで広く使われている。日本のかなや韓国・朝鮮のハングルは漢字を改造した表音文字である。そのほかに古代には西夏やベトナムなどいくつかの民族・国家が漢字にならって自国語用の表語文字をもったが、今日では放棄されている。なお、古代にはアッシリアの楔形文字や南アメリカの絵文字など、ヒエログリフと漢字以外の文字も存在したが今日では使われていない。

(犬飼 2015, 下線は筆者による)

すなわち、現在の世界中で使われている文字の中、漢字およびその派生文字の仮名のみが独自の起源を持っている。ほかの諸文字は共通する先祖のフェニキア文字を持っている。

現在世界中の文字の歴史を見ると、漢字の独特な地位がわかるだろう。漢字は古来東アジア諸国共有の文化財とも言える。地域により発音が違う場合でも同じ字で表すことができるため、国境を越えて漢字を使った筆談でコミュニケーションを取ることにもできる。古典中国語、つまり漢文が漢字文化圏で通行していた。漢字文化圏の国々の学術や史書といった正式な文章で広く使われていた。ある意味で、漢文が漢字文化圏の国にとってはラテン語のような存在であった。現在の漢字文化圏の国において、いまだに漢文が教養課程として高校などで教えられている。韓国における祭などの場合に、使われている祭文が完全に漢文で書かれていることも多い。筆者は古代日本やほかの漢字文化圏の国の詩や文章などを読んでみると、中の趣や言及したものとで常に親近感がわいてくる。

同時に漢字が運び手の役割を果たし、漢字文化圏の国々に儒教や政治制度などを伝えていった。

当時は漢文化が強い影響力を持っていたわけである。漢字が運び手として漢文化を漢字文化圏の国に広げていた。その後ろは当時中国の強い経済力や優れていた社会制度であると言える。

2.2 漢字廃止論の錯誤

文化や社会全体が西洋化する風潮とともに、幕末から明治期の日本で漢字廃止論が生まれた。

幕末期には、前島密が、1866年（慶応2年）12月に前島来輔という名で開成所翻訳筆記方に出仕していた際に將軍の徳川慶喜に漢字御廃止之議を献じた。

前島は1869年（明治2年）、集議院に「国文教育之儀ニ付建議」を提出し、これに「国文教育施行ノ方法」、「廃漢字私見書」をそえて教育制度について建議したが、要は漢字を廃して平仮名を国字にしようとするものであった。さらに1872年（明治5年）には「学制御施行に先ち国字改良相成度卑見内申書」

を岩倉右大臣と大木文部卿に提出した。一方で柳川春三は布告書を仮名で発布すべきことを建白した。しかし、いずれも受け入れられることはなかった。

1872年（明治5年）、学制施行に際して、一部では日本語の文字の複雑さ・不規則性が障害であるとみなされ、福澤諭吉は「文字之教」のなかで、徐々に漢字を廃止して仮名を用いるべきであると主張し、清水卯三郎は平仮名専用説を唱えた。

田中(2011)によると、漢字廃止論を唱える理由は大抵以下のようにまとめられる：

- 漢字は社会階層による知識格差をまねく。漢字知識の豊富なエリート層とそうでない社会階層との知識の共有をさまたげている。
- 漢字は成人と子供との間に言葉の違いを生み、子供が知識を得る障害となっている。
- 漢字で表される漢語は、もともと単音節の中国語に由来するので、同音異義語が増える。そのため、耳で聞いてわからない言葉が増加した。
- 漢字は、日本の大和言葉の発達をさまたげる。
- 漢字の習得は困難であり、学業の落ちこぼれの原因になりうる。

(同上)

以上の現象に関しては、田中（2011）が述べている通りである。しかし、その原因は漢字表記にある点には従えない。なぜならそもそも漢語の割合が高いというのは以上各点の原因であると考える。

国立国語研究所（1972、1980）の調査によると、日本語の中の語種の構成比率は、対象とする資料の性格によって異なる。たとえば、新聞の文章と話し言葉とを比較した場合、新聞の文章では漢語の割合が7割を超え、話し言葉では和語の割合が7割を超えるという調査もある。

したがって、例え表記形式を変えても、学術研究や新聞などの場合は、依然として漢語の割合が高く、話し言葉の中では漢語の割合が低いという状況は変わらないことが予測されると。そのため、漢字が廃止されたとしても、学術研究や新聞の読み書きにおいては、話し言葉とは異なる漢語を勉強し覚えることが不可欠となる。実際に授業のときに、先生が、「難しい言葉で言い

ますと」と言った場合、その後が続くのは漢語である。

日常生活の中でほとんど漢字が使われていない韓国でも、大学の歴史や人文科学はむろん、自然科学の一部でも漢字を勉強しなければ研究を行うことはできない。実際に韓国のウィキペディアなどを見てみると、漢字がかなりの量で存在している。つまり、日常生活の中で漢字を廃止することができても、学術の場合、漢字由来の漢語の使用が欠かせないのである。韓国の例は、漢字を廃止しても、高等な知識を得るためには漢字の学習が欠かせないことを示している。韓国では、漢字廃止後も実質上、知識の格差は依然変わっていないばかりか、逆に漢字の存在が非明示化することでより深刻な格差をもたらされたのではないかと筆者は考える。すなわち、知識の格差をもたらすのは漢字表記そのものではなく、漢字表記に付随して生じる漢語の割合にあると言えるであろう。

以上のように、日本語では、表す内容が専門的になるほど漢語の割合が高い、なおかつ、正式であればであるほど漢語の割合が高いというのは言えるだろう。漢字表記を廃止してもこのような事実を変えることは不可能であろう。

では、日本語の語彙体系において、なぜ漢語は重要な役割を果たしているのだろうか。その原因は漢字が持つ造語能力にあると考える。上代から中世にかけて日本語に漢語を取り入れられたのは、当時の日本語になかった概念を表現するためであったと思われる。貴族などのエリート層は、公文や宗教的な場合などの正式な文章で漢文をそのまま使い始めた。その時点から漢語が正式的だという考えが徐々に日本語定着し始めた。

また、日本語では、漢字の造語能力を活かし、新しい概念を表す場合、大和言葉ではなく漢語を使って対応する語彙が作られる。近代化の中で多くの新たな概念が導入された幕末以降の「和製漢語」がその代表と言える。幕末以降の「和製漢語」とは、西洋からの新たな概念を日本語に翻訳したときに生まれた言葉である。例として以下のような語彙が挙げられる。

文化、文明、民族、思想、法律、経済、資本、階級、警察、分配、宗教、哲学、理性、感性、意識、主観、客観、科学、物理、化学、分子、原子、質量、固体、時間、空間、理論、文学、電話、美術、喜劇、悲劇、社会主義、共産主

義など。

当時の民族主義の高まりや西洋化の風潮にもかかわらず、西洋から導入された語を伝統的な漢語を使って翻訳したのは、仮名に対し、漢字が持つ造語力が優位であることの具現化だと言える。

近年、カタカナ語が急速に増えたことにより、それに対して文字や言葉から意味が連想しにくいという声が高まっている。そのため、国立国語研究所はわかりにくい片仮名外来語をわかりやすくするため、和製漢語などによる言い換え提案をおこなっている。

つまり、大和言葉の造語能力は漢語を取り入れた時点からさまざまな原因によって低下しつつあるというのは客観事実であると言えるだろう。

ただし、漢字は高い造語力を持つものの、日本語の発音に応じて変化した漢語には同音異義語が多いという特徴がある。同音異義語が多く存在する現在の状況で漢字表記を廃止することは混乱を招くだろう。なぜなら、表意文字である漢字表記が存在するからこそ、耳で聞いてもわからない言葉があっても書けば意味を伝えることができるからである。漢字表記が廃止されれば、漢字を知らない世代は、文脈からしかその意味を区別することができなくなる。

事実、日常生活で漢字を廃止している韓国では、このような同音異義語の存在により問題が生じている。実際に起きた事件でよく取り上げられるのは「防水」と「放水」である。ハングルではどちらも「방수」(バンス)と表記される、意味は正反対である。2009年2月16日にあったニュースだが、KTX(韓国高速鉄道)工事に使う枕木の製造マニュアルに「방수」(バンス)と書かれていたのを、製造担当者が逆の意味に解釈し、防水材を入れねばならないのに水を注入してしまったという事件があった。

以上のように、漢語の造語力に依存しており、かつ同音異義語が多いという日本語の現状を考えると、漢字表記を完全に放棄するのはかえって混乱を招く結果になる可能性が高いと言える。

2.3 漢字表記と日本語の国際化

漢字表記を勉強することが時間がかかるから、日本語の国際化を妨害すると

現代の漢字廃止論者がよく主張する。

田中（2011）は、漢字表記と日本語の国際化について以下のように述べている：

最後に、漢字によって、第二言語としての日本語の普及が大きく妨げられているという現実がある。漢字表記を廃止することで、日本語の国際化が促進される可能性は否定できない。

（同上）

果たして漢字表記は日本語の国際化をこれほど影響しているのだろうか。つまり、言語そのものの複雑さが言語の国際化と大きく関係しているのだろうか。

現在事実上の国際公用語である英語はゲルマン語派に属しているが、歴史的な原因で、ロマンス語派からの借用語も数多く存在している。多くの場合は一つの意味に対応する二つ以上の単語が存在する。Joseph M. Williams

（1986）によると、英語の単語の起源は図1のようになっている。単語量的に言うと、多くのほかのほかのインド・ヨーロッパ語族よりは複雑だと言える。

さらに、ゲルマン語派の代表であるドイツ語やロマンス語派の代表であるイタリア語のいずれもスペリング通りに直接発音することができることにに対し、英語の一つのレターが異なる単語の中での発音が常に変化する。歴史的な原因によって、スペリングもほかのインド・ヨーロッパ語族の言語より不規則だと言える。

文法的にも英語には動詞の不規則変形や名詞の複数の不規則変形が多く存在する。以上のすべての英語の特徴は英語を複雑させるようになっていると言えるだろう。しかし、英語の複雑さは英語の国際化を妨害する要因になっていないとも言えるだろう。

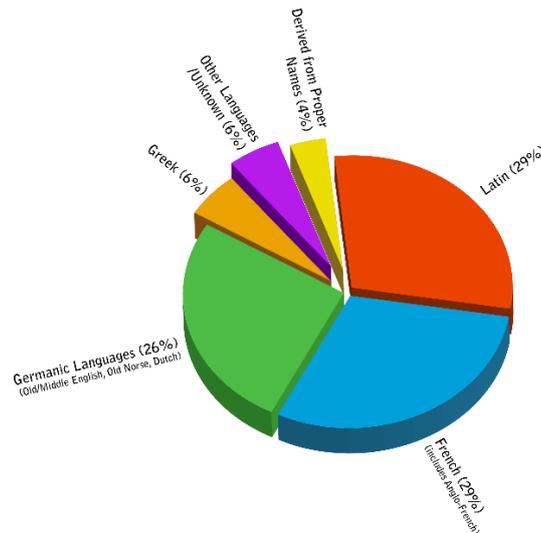


図1 英語の単語の起源 (Joseph M. Williams, 2010)

さらに、英語の複雑さを指摘するよりも、その複雑さ克服し、より効率よく教える研究の方が遥かに多い。言語そのものの複雑さが言語の国際化とは大きく関係しているとは言えないだろう。

19 世紀にエスペラント語という人造言語が出現した。発明者は世界中のあらゆる人が簡単に学ぶことができ、世界中で既に使われている母語に成り代わるというよりは、むしろすべての人の第 2 言語としての国際補助語を目指してこの言語をつくった。だが、現在世界中にいるエスペラント語を話せる人が 100 万人程度存在すると推定されている。すなわち、言語が簡単だと言っても必ず普及できるとは言えない。決定的な要因はやはりその後ろにある経済力や文化の影響力にあると言える。

以上のように、言語の複雑さは言語の国際化に影響する要因だと言えない。最も大事なものは言語の後ろの経済力や文化力の影響力である。よって、日本語の漢字表記も日本語の国際化を妨害する要因だとは言えない。¹

¹本稿では秋田大学「日本語 5-I」の授業に属する留学生 15 名に漢字廃止論に対する態度を調査し、その結果を分析した。その結果は 12 名—約 8 割が漢字廃止論に反対しているということが分かった。以上の結果は、漢字表記が日本語の国際化を妨害する要因ではないことを示唆している。「漢字から日本語の魅力を感じることができる」や「漢字はもはや日本文化のシンボルだ」という意見が出た。しかし、今回の調査の対象がかなり限られている。さらに大人数の対象に対する調査をすることは、今後の課題とする。

3. 漢字廃止論の出現と社会背景とのつながり

前に論じたように、漢字廃止論者が主張する様々な弊害のものは漢字表記になく、しかも漢字表記に廃止は混乱をまねきかねないなら、なぜ幕末明治という時代に漢字を責める思潮が現れたのだろうか。当時の社会背景とのつながりがかなり深いと考えられる。当時の政治面、経済面、文化思想との関係を考察していきたい。

3.1 統一国家の建立と民族主義の形成

漢字廃止論が出現した幕末明治という時代には日本の政治がよほど大きく変化したことは広く知られているが、そのあらゆる変化の中でも幕藩体制から統一国家に転じたことが日本の政治生活に最も影響の強い事件であろう。統一国家の建立の政策的な具現化は廃藩置県だと言えるだろう。

廃藩置県の前の日本の状況については、各藩の藩主が主な権力を持ち、中央集権ではなかった。各藩の間の交流も明治以降よりはるかに少なかった。一般民衆の認識では、民族や国家という概念すらなかったと言える。各藩の民衆は違う藩の人と同じ国だという認識すらなかった。日本という国よりは自分が所在する藩に対し最も帰属感が強いただろう。こうした状況では、言語と政治とのつながりはまだ緊密だとは言えない。当時の日本人にとって漢字はただの便利な工具だと言えるだろう。現代よりも漢字の使用がさらに多く、常用な漢字の文字数も現代より多く、漢文を順調に書ける人も数多く存在していた。この状態は当時日本語が人為的に干渉されずに自然に発展した結果だと言える。

しかし、廃藩置県や中央集権とともに、全国の一般民衆の間の交流がさらに活発になる。統一した言語や書写システムが自然に必要なとなる。事実上、「日本語においては、明治中期から昭和前期にかけて、主に東京山の手教養層が使用する言葉（山の手言葉）を基に標準語を整備しようという試みが推進された」と金水（2000）が述べている。

同じように、書写システムも統一した標準が求められていると言える。この条件に基づき、さらに漢字を廃止するかどうかと言える。つまり、統一国家の形成が漢字廃止論の生まれの必要条件であると言える。これが漢字廃止論が幕

末明治という時代に出現する一つの要因だと言える。逆に言うと、日本がずっと幕藩体制のままだと、漢字廃止論が出現しづらいと考えられる。

幕末明治という時代に、日本には民族主義あるいはナショナリズムという思想が現れた。ナショナリズム（英：nationalism）とは、国家という統一、独立した共同体を一般的には自己の所属する民族のもと形成する政治思想や運動を指す用語²。日本語では内容や解釈により民族主義、国家主義、国民主義、国粹主義などとも訳されている。日本においては、民族主義は江戸時代末期に水戸学・国学の影響を受けた尊王攘夷運動として現れ、明治維新の原動力となった。

民族主義の一つの特徴は自国あるいは自民族のものを重んずることである。同時に他民族から取り入れたものを排除する。日本は古来中国から文化的な影響を多く受けていたが、民族主義の影響で多くの分野で日本は中国からの影響を排除しようとしていた。一つの例として宗教面では明治政府が廃仏毀釈という政策を出した。仏教の影響を弱まり、自国独自の宗教である神道を重視していた。こういう政策の後ろには民族主義というものがあると言えるだろう。

当時の漢字廃止論の濫觴である前島来輔（前島密）の『漢字御廃止之議』の中で、学习上困難な漢字、漢文を廃止して仮名文字を用いるのを主張している。さらに、中国（清）の国力が（アヘン戦争に敗れたりして）衰退しているのは、難解な漢字を使用していることに由来するものであり、このことから、日本においても国力が振るわず、なおまた、日本人の知識が劣っているのは、仮名がありながらも（衰退している中国と同じ）難解な漢字を使用していることに原因があると主張している。

この主張から明らかに民族主義の影響が見えてくる。前島の原文がほぼすべてが仮名を用いて書かれた。実際に読んでみると非常に読みにくかったとは感じている。読みにくさにもかかわらず、民族主義の影響で依然として漢字を廃止することを主張する。実際には漢字の読みやすさを発見し、主張する論の出現は近年のことである。

以上のように、幕末明治に漢字廃止論の出現の要因として、政治面では統一

² 『ブリタニカ国際大百科事典』

国家の建立と民族主義の形成がある。

3.2 西洋に経済的な後れ

現代の最も直観的な経済的データを見ると、日本の GDP は 1964 年から現在まででアメリカ以外のすべての西洋の国よりは高い。(データは世界銀行より)

しかし現代に反して幕末明治という時代は日本が西洋からの外力によって鎖国政策を廃止し、初めて大規模に西洋と接触していた時代だと言えるだろう。経済力においても技術力においても西洋より後れをとっていたと言える。幕末や明治初期に侵略を受け、多くの不平等条約を結んでいた。

当時の経済力をもたらした原因である産業革命の中心も西洋であり、前文に述べた民族主義や民主主義といった近代思想の発祥の地もすべて西洋にある。近代の世界の中心が西洋にあると言える。日本社会は全体的に西洋に後れをとっていた。こうして初めて大規模に国力の差の激しい西洋に接触し、自然に自国の伝統を見直す思想が多く現れるわけである。政治制度や技術力などを国力の後れの原因として捉える思想もあれば、自国の文化がその原因になるという思想もある。こうして漢字を責める思想も自然に現れた。このような国力の後れが漢字廃止論の出現する土壌となっていた。

前島来輔は、日本においても国力が振るわず、なおまた、日本人の知識が劣っているのは、仮名がありながらも（衰退している中国と同じ）難解な漢字を使用していることに原因があると主張している。

この論から国力の後れが漢字廃止論が出現する根本的な原因だということがはっきり分かった。

当時にはすでに漢字廃止論に反対する声が出現した。幕末・明治期の漢学者である川田蕯江（1884）が日本語版『大越史記全書』の序の中で以下のように述べている：

安南與暹羅，地相近也，風土相似也，疆域、人口相若也，而安南削弱，爲佛人所制。暹羅則物饒政舉，頗至富。庶論者求其故，不得，乃曰：安南用漢字，通觀宇內，凡用漢字之邦，委靡不振。嗚呼，果如其言，則印度既亡，暹羅何以用其字；羅馬既亡，歐米各國何以用其字。蓋嘗考之，

國勢之振不振，在乎自強與倚人。自強者畜財練兵，事主實效；倚人者籍力大國，務張虛威。（中略）

從時厥後，世運變遷，雖不可取古律今，而其籍力大國，不能自強者，既已見衰兆於數百年前。參以暹羅紀行，則彼此得失，不難辨焉。論者其勿罪漢字可也。

（同上，下線は筆者による）

大体の意味は：

ベトナムとタイは様々な点に関しては似ているが、ベトナムはフランスより植民され、弱まっている。それに対し、タイは独立国家であり、経済力もそこそこある。その原因は「ベトナムが漢字を使用し、タイが使用していない」ということにあると考える学者がいる。本当にそうであれば、インドが植民されているのに、なぜタイがインド発祥の文字を使用しているのか。ローマ帝国が滅亡したが、なぜ欧米諸国がローマ帝国の文字を使うのか。国力があるかどうかは自身の経済力などの実力にあり、漢字を責める必要がない。

川田（1884）が述べる通り、国が強いかどうかは文字とは関係なく、経済力があるかどうかに原因がある。この点に関して本稿も同じ見解である。

日本が現在の国力を成し遂げたのは戦後に健全な社会制度と努力して発展した技術力そしてそれに基づいた経済力にあると言える。現在において漢字廃止論も下火になっている。しかも、日本文化のシンボルになるときもある。

国の国力が文字を含めた文化の強さに影響を与える。逆に文字が経済力や国力に影響するとは言えない。

4. おわりに

以上、本稿では、漢字廃止論に対して反論するとともに、漢字廃止論の出現とその社会背景とのつながりを考察した。その結果、まず、漢字廃止論は現代社会に適していない。まずは、漢字廃止論者が普遍的に主張する漢字表記の弊害は漢字表記が原因ではないと論じた。さらに、漢字が日本語の国際化を妨害する要因だと漢字廃止論者が普遍的に主張することについて、英語はほかのヨーロッパ言語に比べ、複雑であるが、その国際化を妨害していないことを論証した。つまり、言語が簡単であれば国際化が成し遂げやすいとは限らないと論じた。

さらに、漢字廃止論の出現に関しては、以下の三点が関係していることが明らかになった。まずは、政治面では、幕末明治に統一国家の建立と民族主義の形成が漢字廃止論の出現の前提となった。次に、経済面では、西洋などの国に接触し始めたことにより、経済や技術の後れに気づいた結果き、自国の伝統を否定するようになり、漢字廃止論が自然に出現した。最後に、文化および思想面では、経済などの後れによって社会全体的に西洋を崇拝する風潮が生まれた。これらが、漢字廃止論をもたらした直接的な原因となった。

以上の結論は、漢字廃止論の出現は特定の社会背景に基づいて生まれた一種思想であり、現代には適していないことを示している。ことばの多様性を守るため、漢字廃止論のような思想に対して、は言葉を民族主義や政治に結びつけるべきではない、人為的に言葉の発展を干渉すべきではないという態度をとるべきだと言えるだろう。

しかし、本稿の考察対象は日本における漢字廃止論であり、ベトナムや韓国など漢字をすでに廃止した他国の状況を考察することはできなかった。他国の漢字廃止論も、日本と同様に特定の社会的背景に基づいた思想によるものだったのだろうか。これらの国の状況については、更なる調査が必要である。この点については今後の課題としたい。

参照文献

犬飼隆（2015）「漢字が来た道—大陸から半島を經由して列島へ」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』, 194:237—244.

金水敏（2000）「役割語探求の提案」佐藤喜代治(編)『国語史の新視点』国語論究, 8:311-351, 明治書院.

川田甕江（1884）『大越史記全書 序』.

国立国語研究所（1972）『電子計算機による新聞の語彙調査 3』, 秀英出版.

国立国語研究所（1980）『日本人の知識階層における話しことばの実態』, 国立国語研究所日本語教育センター.

田中克彦（2011）『漢字が日本語をほろぼす』東京：角川SSC新書.

Joseph M. Williams, *Origins of the English Language*, Free Press; Reprint edition, 1986.